
ポイント・オブ・ビュー ～【組織目線】から見る組織崩壊～

ハシルケンシロウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポイント・オブ・ビュー 〈【組織目線】から見る組織崩壊〉

【Nコード】

N5588B

【作者名】

ハシルケンシロウ

【あらすじ】

※申し訳ありません、一話目でのキールのポジションに対する読み違いが甚だしく、ただ今物語の骨格が致命的に歪んでいる状況となってしまうています。ただ今、構成練直し中です。なるだけ被害は最小限に止めたいところですが、場合によっては削除、書き直しということになるかもしれません。他の連載が軒並みレッドに入ってしまったこともあり、それが片付くまで休載という形を採らせて頂きたい思います。重ね重ね申し訳ありません。2008/3/9
ハシルケンシロウ

1 【キール】《【あの方】はわたしを捨て石にする気なのか?》（前書き）

コナンFFでは初めまして（^o^）／

今回はキールがなぜあんなに目立つ仕事をしているのかという疑問を勝手な解釈で潰してみました（本編から回収した伏線は無し）（
^ | ^ ; ）

構成上の都合でオリジナル構成員を一名出しています。ご了承ください
さいm（ | ） m

また、書き始めた段階では、怪盗1412号（黒羽盗一）があの方だと踏んでいたのですが、あの方予想スレッドに参加しつつ単行本を読み返すことでは有り得ないことだという結論に到り、第一話からそれ系の伏線を全て削除いたして居ります（^ | ^ ; ）

初期段階とは内容が若干変わっておりますが、ご了承くださいm（
 | ） m

1 【キール】《【あの方】はわたしを捨て石にする気なのか?》

彼女のコードネームは【キール】。その表向きの顔は、日売テレビの売れっ子アナウンサーである。

キールが所属する組織。その組織のシンボルからーは黒。その色に象徴されるように常に水面下に潜伏し、秘密裏、隠密裏に行動を起こす。

そんな組織のボスである【あの方】の命で、キールは、日売テレビに就職したのだ、報道部付きのアナウンサーとして……。

あからさまな矛盾に満ち満ちているこの現状を、いったいどう解釈すれば良いのだろうか。

《【あの方】はわたしをいざというときの捨て石に使う気なのだろうか》

彼女のそんな疑念が閉ざされている筈の深層心理から、いや、半開き状態のパンドラの匣から、モクモクと揺らめき広がる黒煙のようになり立ち上ってくる。

キールは、【あの方】からの信頼を得るために、自分の父親を自分の手で撃ち殺して見せた。この事をジンはかなり軽く見ているようだ、彼女にとっては血の繋がった父親だったのだ。

にも関わらず、この扱いである。全く以って、遺憾以外の何者でもなかった。

そんなキールに転機が訪れる。キールの運命を動かす者との出逢

いがあったのである。

一目で判った。この女は同類であるのだと。一目で判ってしまった。この女の心の底に、深く暗い怨嗟の海が広がっていることを。そう、一目で判ってしまったのだ。今日の自分の番組のゲスト門倉麻里愛という女は、間違い無く、組織に引き込める相手なのだということが。

必要以上の装飾は一切無いシックな装いのセットに囲まれた二人の美女。その一挙一動を絶対に逃すまいと、6台のカメラがそれぞれの定位置で必死にその動きを追い、それを操る者共の生命を繋ぐ糧となっている。

何度経験しても振り払う事の出来ない〈生放送〉のプレッシャーと必死に闘いながらキールは女と対談を続ける。

「あなたのご両親はどのような方なんでしょうか？ とっても素敵な方なんでしょうね」

キールが発した質問は、至って当たり障りの無いものだった。全く以って、当たり前な日常会話の筈だった。

だが……、

「関係無いでしょ！ そんな……、あたしん家の事情なんて、どう

だっていいじゃないですか!」

女は明らかに取り乱した。

生収録中に、人気急上昇中のアイドルが、片目を狐目に、逆の目を般若のような目に歪め、青筋の浮かんだ顔をピクピクと痙攣させながら、至近距離で猟銃による発砲事件でもあったかの様な轟音を起してデスクを殴りつけ、獲物を捕える猛禽類のような素早さと力強さを兼ね備えた身のこなしで立ち上がってしまったのだ。

この女のパンドラの匣は、どうやらこれであるらしい。どうせなら、とことん喰らわせてやろう。暗闇に沈めれば沈めるほど、そこから救い上げてくれる【あの方】の存在が大きくなる。

「どうかしましたか?」

とりあえず探りを入れてみる。

「あっ、いえっ……、あの、サスペンスドラマ製作関係の方、見えますかあゝ!? あたし、こういう演技も出来ますんで、性格悪いことやってブツ殺される役以外の役も下さい!」

そう言うやいなや、女は見事に顔から青筋を消し去り、目付きを目尻の下がった鈴なりの目に矯正してきた。さすがは芸能人といったところか。

ここでこのような話題に逃げたくなるのも解る気がした。なにせこの女、ファンから授かったニックネームが【死体美の極致】である。

【二時間サスペンスのテレビ欄に門倉麻里愛の名前を見たら、一番始めに死ぬと思え】という不文律があるぐらい、この女は二時間サスペンスドラマの常連であり、そして、ほぼ間違い無く一番始めに殺されてしまうのだ。

こういった事情もまた、引き込む材料となりそうだ。

《直ぐに転がる側じゃなくて、転がす側に回してあげるわよ……》

ここから先、先程のような波乱もなくスムーズに放送は進んでいった。

杯戸シティーホテル前。日売テレビ本社はそこにある。その建物から、ホテルに直行する女が二人いた。縛った髪を下ろして顔に被せ、リングの山村貞子のようになったキールと、化粧を落として、毛先をもてあそびまくった女だ。

美女二人のツーショットであることに変わりはないが、なにやらホラー映画の世界に迷い込んでしまったかのような一種異様な雰囲気、この二人によって杯戸シティーホテル前の公道にもたらされていた。

初めての出逢いから数ヶ月が経ち、キール等はかなり解り合うことが出来た。これもひとえに、キールがテレビカメラの前で見せている打ち解け易いイメージのお陰であろう。

だが、

まだ女のパンドラの匣をこじ開けるには、時期早焦だ。そこでキールは、女の心にどこまで自分が根付いているかの確認に入る。

「あの……」

眉を下げ、伏し目がちにして、とても言いずらそうな雰囲気をもし出す。

……、……、……、……。

長い沈黙。このタイミングのそれは、まるで時間が止まってしまったかのような、二人を取り囲む全てが止まってしまったかのような空間を作り出す。

「どうしたの、怜奈さん？」

沈黙に耐えかねたのか、女が表向きの名前を呼んで問うてきた。

「あのね、100万円貸してくれるかな……」

キールが、申し訳無さげに極限まで眉を下げて切り出す。その言葉に、女はあからさまな驚愕の表情しか返してこない。鈴なりな垂れ目は大きく見開かれ、瞳孔が開いて瞳が白くなっている。

「なんだって急にそんな……！ そんな大金何に使う気なの！？」
やっと返して来た言葉は、疑問符の嵐だった。

その問いに対して、キールは更に顔を伏せ、消え入るような細かい声でこう答える。

「あのね、弟が……、来週手術なの……。白血病で骨髄移植なんだけど……、一括で100万円必要なの!!!」

とてもアナウンサーの発している言葉とは思えないほどの要領の得なさだが、それがかえって、身内が大変なことになっているのだというリアリティーを生んでくれる筈だ。勿論その効果を狙って発した言葉であることは、言うまでもない。

「……、解った。100万円、作って来る。怜奈さん、給料日いつ？」

女は、承諾してくれた。だが、頭からそれを信用するわけにはいかない。女の言葉が本心か否か……、キールは確認に入る。

女の顎に左手をかけて、ようやく黒真珠のような輝きを取り戻した瞳を、色素の薄い青みがかった瞳でじっと見つめて……、こう問う。

「本当に100万円、貸してくれるの……？」

女が身震いした。あまりにも真剣な、キールが普段見せている表情とは全く正反対な、凄味を持つ真剣な顔が、女の顔の至近距離で息付いているのである。気押されるのも無理はない。

「大丈夫。一週間無利息と一ヶ月無利息のサラ金知ってるし、今までどこからも借りたこと無いから間違い無く50万ずつ貸してもらえろ。」

プレッシャーにも負けずに女が返して来た言葉には、どうやら嘘偽りは無いようだ。本気で消費者金融に走ってまで100万円を作ってくれるつもりらしい。

女が自分のことを信用しきっていると判断したキールは、いよいよ女のパンドラの匣を開ける……。

「麻里愛ちゃん、あなた、ご両親と何かあったの？ 初めて会ったときのあの反応、どう見ても普通じゃなかったし、わたしに出来ることなら力になるわよ」

親の話を出した瞬間、やはり女の目の色が変わった。輪郭こそ鈴なりな垂れ目をキープしてはいるものの、徐々に開き出したその瞳孔が、ここが精神的な急所であるということを如実に物語っている。

「……、わたしってそんなに、信用無いのかな」

そんなことは無いということは既に解っている。案の定、

「そんなこと……、ないけど……」

という返事。

信頼しているうえで言えないとなると、女にとってはよほどの大事なのだろうが、組織に引き込むためには、どうしても言ってもらわねばならない。

「お互い、隠し事無しで行こうよ……、ね？ 麻里愛ちゃんが話してくれたらわたしもわたしのこと全部話すから。溜め込んでるより話した方が楽になれるんだし」

自分もまだカードを持っていることを匂わせてみる。

……、……、……。

止まった時間を動かしたのは女だった。

「あたし、殺してやりたい奴らがいるの」

突然始まった驚愕のカミングアウトにも、目の色一つ変えずにキールは聞き入る。

女が仕事でオーダーした杯戸シティーホテル3019号室は、まるで無人であるかのような静寂が支配している。その空気を震わせたのは、またしても女の声だった。

「でも、どうしても出来ないんだ……。産んでくれたとか、育てて

くれたとかそんなんじゃないかってさ、その、もう……、死んじゃってるから、……あいつら」

この後、もうどうにもならないんだよね、と自虐気味に笑いながら女は締め括った。

女の告白は、終了した。今度は、キールが自分を語る番だ。

「気持ちには解るわよ。わたしもお父さん、殺した女だから」
無論現段階では、心の中でね、との嘘を付け加えたのだが。

「だからこそ、あなたを助けてあげたい。わたしには……、それが出来るから」

もう、言っても大丈夫だろう。キール達の組織の目的、自分が身を置く場所のことを。

「わたしね、新しい世界を創ろうとしてるの。そしてそれには必要不可欠な薬、体細胞組織のレベルから一度破壊して、それを新たに紡ぎ直すことの出来る薬をわたし達は、今作ってるの。そのくす……」

言い切る前に、目を皿にした女が割り込む。

「完成すれば死人を生き返らせるってこと!？」

「どうやらそれなりに頭が切れるらしい。余計な説明を加えずに済むのは正直な話、とても助かった。

「そう。出来るだけ多くの人を真更な状態に戻して一から出直す。それが組織の目的」
「かい撮んで目的を話す。」

「なるほど、神になろうって訳。そうなれば間違い無く、国家レベルの戦争は、核戦争は無くなりそうだね。反戦団体なの？」

「反戦云々はおそらくはジョークの類なのだろうが、とんでもなく頭が切れる女らしい。もしかすると、ジン以上かもしれない。」

「で、組織員の勧誘に具体的な薬の効能を出してくるってことは、ある程度出来上がってんでしょ、その悪魔の薬」

「ここまで読まれている。刑事か探偵の血でも引いているのだろうか。」

《敵に回しちゃいけない。そして、絶対引き込まなきゃいけない》
それがキールの出した結論。運良く、女はいい方向に考えてくれているようだ。ショッキングな話をしているにも関わらず、その瞳は今までに無いようなそれはそれは素晴らしく澄み切った、黒真珠以上の輝きを放っている。

「玲奈さんがボスなの？」

明らかに入る気満々の返事だ。この女とは馬が合うし、間違い無く上手くやっていたいける。それよりなにより、作戦参謀として、これほど心強い味方はない。

《殺してしまうのはあまりにも勿体無いわね》

最終判断を下すのは、あくまでも【あの方】だが、気に入っても

らえるための、精一杯のサポートをしようと、キールは女の親友として心に誓った。こうして、彼女は、女を組織に加えるべく杯戸シティーホテルを出たのである。

彼女のコードネームは【キール】。表向きの顔は日売テレビの報道アナウンサーだ。

【あの方】からの指令は、【構成員のスカウティング】。

駆け出しの頃はその指令に疑問を抱いていたが、今では、天命であると実感している。だって、組織内に親友が出来た上に、彼女に【人を見る目】の確かさを認識させてもらったのだから。

親友の名は門倉麻里愛。コードネーム【月桂冠】。キールの仕事の初成果であり、組織の作戦参謀だ。

1 【キール】《【あの方】はわたしを捨て石にする気なのか?》（後書き）

当方、事情により単行本33刊から51刊までの伏線が、ガッポリ欠落しております（TOT）

それ以外の刊からの伏線は極力回収していく所存ですが、いかせん、本編から脱線した（件の刊にある伏線からは有り得ないと思われる）展開になることが多分に予想されます

（TOT）

（今回のキールにしたって、別な真相がとっくに出てるかも知れないし……（TOT））

構成員説、あの方説等いろいろ飛び交っている、コナンサイドのあの人達（Y、Y、H、H）も、当然無関係ではありません

（V、）

今回は、今回仲間に加わったオリジナル構成員【月桂冠】にスポットを当てる予定です

○（^ー^）○

ではでは（^o^）／

2 【月桂冠】

《組織に残留する理由はもはや皆無なのである》

——わーっ！　ひとごろしがきたぞー！——

それは、彼女が生まれついてまだ一桁の年数しか経っていなかった頃に浴びせられた言葉。

——やーいやーい！　おまえのとうちゃん　ひとごろしい——

それは、どんなに逃げようとしても、いつも彼女のすぐ後ろを追ってくる【真実】。

——たすけてー　ころされるう！　逃げろー！——

《なんでなの！？　あたしはただ……、

友達が欲しいだけなのに……》

——おまえのとうちゃんひとごろし！　ついでにおまえもひとごろ

しい！――

《ひどいよみんな！ あたし 誰も殺してないのに！！》

子供達が、一人の女の子から逃げるように遠ざかっていく。

――……姐……、……、す……い――

女の遠い日の悪夢に、割って入る男の声。

最近やけに聞き馴染んだ、バスでもテノールでもない不思議な声。

《どこなの！？ あたしを呼んでくれるあなたはどこにいるの！？》

彼女が、プライベートで誰かから呼び掛けてもらえることなど、そうざらにあることではない。

「誰なの、お願い！ 顔を見せて！ お願い！」

必死に呼び掛ける彼女の前に、突然何者かが現れ、脇見疾走中の彼女と衝突してしまった。

当然二人は、冷たいアスファルトの上に尻を落としてしまう。

「……、ごめんなさい……」

相手の女が謝ってくる。

聞き覚えのある声。

職業的なものなのか、必要以上に張りのある、よく通る女の声。

彼女は思わず声をあげた。

「怜奈さん！」
と。

水無怜奈は親友だ。怜奈が自分を見捨てる筈がない。
彼女はそう、信じて疑わなかった。

「あっ、ごっごっ……、ごめんなさいごめんなさい！
助けて下さい！ 殺さないで下さいー……」

「えっ……？？？？」

震えによってガチガチと奥歯を鳴らし、泣いて土下座をしながら命を乞う。

その行為は、明らかに彼女が殺人鬼だと認識されている根拠となる。

「なんで……？ やめてよ……。」

なんで怜奈さんまで、そんなこと言うの？」

彼女が必死に語り掛ける言葉も聞かず、怜奈はひたすら命を乞い続けている。

「……、……、……」

時間が止まってしまった。

彼女の心の中に、虚しさと悲しみの風が吹き抜ける。

「……、……、……」

やがてそれは、嵐となり、

「……、……、……」

そして、冷たい冷たいブリザードとなって、彼女の心全体に渡って吹き荒れてしまう。

「……やめて、お願い……、もうやめてえええ!!」

——麻里愛!!——

突然名前を呼び付ける声。

怜奈とぶつかる前にきいた、中音域の男の声だ。

——目え醒ませ!——

突然頓珍漢なことを怒鳴り付ける男。

《何だっつのよ!? 起きてる相手に【起きろ】って》

正直訳が解らない。

自分は確かに、覚醒しているのだ。

次の瞬間、両側の頬に熱さを伴う鈍い衝撃が走り、彼女の意識は暗黒の彼方へ引き込まれていった。

「えっ!？」

あれっ？

怜奈さんは？」

月桂冠が意識を取り戻した場所はシンプル且つ、シックな調度品がこそこしかないという絶妙な位置にセットされてある、なかなか小洒落た雰囲気、白を基調とした一室、杯戸シティーホテルスイートルームだった。

その風景と同時に目に飛込んで来た二人の男が居た。190cmは有るかと思われるヒョロッとした細長い体格に金色の流れるような長髪。組織内で【ジン】と呼ばれている男と、なにかスポーツでもやっていたのだろうか、ガッチリムッチリした筋肉質の体格に、いつも外さないトレードマークと化しているサングラス。組織内で【ウォッカ】と呼ばれている男だ。

いつものように、気だるそうな動きで煙草に火をともしながら、四六時中瞳孔が開ききったジャンキーのような目付きで月桂冠を一瞥した後、

「テメエから呼び付けといてホテルでお昼ねたあ、いいご身分じゃねえか……」

との言葉をドスの利いた低音域でジンが投げ掛けてきた。

この男、見た目によらずなにげに嫌味であるため時々対応に困ることがある。

「あたしを騙して引き込んで、いいようにコキ使ってるあんた達よ

か身分は低そうだけどね」

騙された。初めはそう思っていた。たが、それはあくまでも、自分の不注意だった。

石橋を叩いて渡って来た筈の自分が、親を生き返らすことができるという言葉に釣られて、危ない橋を猛ダッシュで渡り切り、振り向いた時にはもう橋が崩れ落ちてしまっていたのだ。

黙ってさえいれば、若手アイドルの中では一番の美人ではないのかと噂される端正な顔立ちが、瞬く間に落胆に歪んでいく。

「まあ、普通に考えたら完全な状態の死体も用意しないで、奴らを生き返らせれるなんてことあるわけないんだけど……」

自分の不明であることが解りきっているだけに、その表情は更に沈痛さを増していく。

暫くの沈黙。

正に気まずく滞ってしまったように思えるこの時間がまだしつかりと動いているのだと教えてくれる存在は、ジンが口にくわえている煙草から立ち上る一筋の紫煙のみである。

この異世界に迷い込んでしまったかの沈黙を破ったのは、夢に出てきた例の中音域だった。

「でもキールのヤツは月姐引き抜くとき、薬の効能は漏らさず伝えたって言ってやしたぜ？」

月姐も聞いてやすでしょ？

人を殺して、そしてそれをすぐに生き返らせる薬だって」

キールから聞いた説明を俗っぽい言葉に言い換えると、おそらくこの類の言葉になるのだろう。

月桂冠の思考がまとまらないうちに、ウォッカがまた、言葉を続ける。

「信じられねえ気持ちも解りやすがね、実際薬で生き返った野郎が俺達の目の前を……」

ウォッカは二の句を継ぐことが出来なかった。

「そこまでだ、ウォッカ……」

というジンの言葉が割って入ったためである。

心なしかいつもよりドスの利いた声色を発していたような気がする。微妙な声色の変化で相手に様々なプレッシャーを与えてくる男、それがジンなのである。

そして、声色の魔術師ジンは、こう二の句を繋いだ。

「月桂冠、俺達に寝顔を観察さすために呼び付けた訳じゃねえんだろ……」

用があるならとっとと済ませろ……」

「もし……、いや、もしもの話だよ？」

もしわたしが抜けるって言ったら、あんた達はどう出る？」

これは、真実に気付いたときに、ほんの一瞬脳裏をよ切った考え。

両親の蘇生は不可能であると理解した時に生まれた、偽らざる本心。

月桂冠が執着する薬の使用目的は、あくまでも両親の蘇生であり、それが叶わないことが確定している現段階において、彼女が組織に残留する理由はもはや、皆無なのである。

だが……、

やはり、このような戯言を聞き入れてくれるような集団ではないらしい。

ジンから返ってきた返事は、

「そんなときや、おまえの願いが叶うときが来るだけさ……。」

おまえがあつちに両親に会いに行く形でなあ……」
というものだった。

黒沢陣。

この男には、なぜ相手に有無を言わせなくなるような、まるで闇魔王でも相手にしているかのような会体の知れない威圧感があるのだろう。

この男が放つ、史上最強クラスのプレッシャーによって、タレントとして培ってきた度胸も、陰陽師として培ってきた技も、自分のアイデンティティーもろとも、見る影もなく叩き潰されてしまった。

ジンによって誘われた総てが歪んで醜くひしゃげた世界から脱出するには、とにかく何かジンに向けて言葉を発さなければならぬ。

月桂冠が選んだ言葉は、

「いや、冗談だよ冗談。

なにマジになってんの？

乗った船には最後まで乗っかってるわよ。

ましてこんな面白そうな船旅、途中で降りるわけ無いじゃん」

ジンの、相変わらず瞳孔の開いている瞳を凝視しながら放ったこの言葉だった。

【男がこの行動を取りながら語る言葉は、真実である。

だが、女の場合は、嘘である確率が九割近くにのぼる】というデータが臨床心理学の世界で発表されている。

ジンがこのデータを知っているか否かは定かではないが、
「まあいい……。」

こっちもおまえに用がある……。

あの方からのお達しだ……。

杯戸中央病院に潜ってたチューハイが連絡を絶った……」

そう言いながら、ジンがまるで勿体付けるように煙草の灰を灰皿に落とす。

そして、

「そこにキールが捕まってることは間違い無えようだ……」
と、言葉を繋げた。

《怜奈さんが!?!》

親友の、宿敵であるFBIに監禁されている親友の所在が確認された。

月桂冠の脳内で、救出作戦のビジョンがめまぐるしく構築され始める。

「俺達は病院に乗り込んでキールを……、……、……」

肝心の指令内容の中核を告げる段階でジンは意味不明な間をつくっているが、そんなことはどうでもよかった。

救出作戦のビジョンは既に八割方完成されている。

ジンは、吸い切った煙草を灰皿で揉み消しているようだ。

そして、作戦が完成したその刹那、月桂冠は二度と這上ることが出来ないような底無しの闇の世界に放り込まれてしまった。

「バラすことになった……」

それがジンの口から継がれた二の句。
そして、

あの方からの……、命令。

《冗談じゃない！

玲奈さんを殺すぐらいなら、もう身動きが取れないレベルまで組織
をブッ潰してやる！》

月桂冠、否、門倉麻里愛はたった一人での親友救出作戦を考え始めた。

彼女のコードネームは【月桂冠】。

彼女は今、一身上の都合により、組織を内側から潰そうとしている。

2 【月桂冠】 《組織に残留する理由はもはや皆無なのである》（後書き）

お久しぶりです（＾Ｏ＾）／

やはり、キールの件に関しては読み違いだったようですが、なんとかこじつけることが出来ました（＾―＾；）

これじゃあ先が思いやられるなあ……（TOT）

今回から徐々に本編からの伏線を拾い始めてます（＾Ｏ＾）

次回は……、ヤツが出てきますぞ（＾―＾）○

3 【ジン】 《この瞬間、俺は宮野に負けたんだな……》

どうしても急がなければならない。

このままでは、体が崩壊してしまう。

時の流れに逆らおうとした者が受ける罰、それは、筆舌に尽し難い程、極めて凄惨なものだった。

アポトキシン4869。

彼等が出来損ないの名探偵と呼んでいた毒薬は、毒薬として開発した物ではない。

これを毒薬として量産することを思いついたのは、データ検分の最中で毒薬として使えることに気付いた宮野厚司だった。

本来の目的は、若返り、不老化、死者蘇生。

この三点だ。

これを医療の世界で役立てようとしていたのである。

あの時までは、研究は順調に進んでいた。

だが宮野とジンのせいで、組織は新たな研究に手を出さなければならなくなってしまった。

結局そのことが、シェリーとの破局、そして、己の崩壊寸前な肉体へと繋ってしまったのだ。

ジンが、かつて結婚の約束まで取り交わしていた女性を殺害するために追い回さなくてはならなくなってしまった原因は、彼が自ら刃物で喉元を突いたことにある。

闇の世界。

それは、徹底した完全実力主義の世界。

あの時のシェリーはまだジンの身分に及ぶ程の功績を上げてはいなかったのである。

にも関わらず彼等は、交際を始めてしまった。

当然ジンは下から、シェリーは上から、物凄いバッシングに遭う。

《なんであんなこと……、しちまったんだろうな……》

そんなことは例え本人であれ、解る筈もない。

黒のパンツ、黒のロングコート、白いハイネック、黒と黄色の山高帽。

それがいつものジンのスタイルだ。

さすがに夏場は若干暑いが、建物にも、愛車のドイツの雨ガエルにも、ガンガンエアコンが利いているため、然程辛くもない。

ジンにとっては、暑さよりも返り血の目立つ服装や、喉元の傷跡が見えることの方が余程辛いのだ。

だから、黒ずくめの長袖に、ハイネックなのである。

ジェットコースターの風圧にも飛ばない山高帽はご愛嬌だ。

あの日もこの服装で、埠頭にいた。

海辺にはいつも、必要以上に強い風が吹いている。

《これで……、決定打になるんだろうな……》

フィアンセとの破局。

どうやら後戻りは出来ないようだ。

10億円の受け渡しが終われば、取引相手の体に余計な穴が1つ増える。

生きるのに必要のない穴、死ぬのに必要な穴。

相手の名は宮野明美、シェリーの……、

姉だ。

彼女自身には、何の非もない。

そんなことは、解り切っている。

だが、ジンはどうしても明美に銃弾を撃ち込まなければならなかった。

完全な形で自分を取り戻すために。

浜風は、より一層強さを増し、狂ったように吹き荒れている。

来ないでほしいと心のどこかで願い続けている彼の僅かに残っている良心を吹き消してしまおうとしているかのように。

取引きの時間まであと一時間四十五分。

時間は無情にも、ジンからシェリーを引き離していく。

あの宮野厚司の娘なんかに惚れてしまった時点で、こうなる運命だったのかも知れない。

研究中のアポトキシンを毒薬として使うことで、組織の乗っ取りを目論だ宮野厚司の娘に。

当然この瞬間から、宮野家は組織の殺害ターゲットに挙がっている。それを解っていないながらジンはシェリーに、否、宮野志保に手を出してしまったのだ。

《この瞬間……、俺は宮野に負けたんだな……》
……、完敗だ。

取引きの時間まであと一時間三十分。

ジンの、壊れかけの体に情け容赦無く浜風が吹き付けてくる。

明美には、10億円の強奪に成功すればシェリーを解放すると言っている。

あの女だって馬鹿ではない。

組織内における宮野家の者の立場というものも、薄々感付いたのだろう。

直ぐに乗ってきた。

だが、ジンにとっては、金などどうだって良かったのだ。

なぜならこの10億円事件は、明美を自殺に見せかけて殺すことのみを目的として計画したものだったからである。

取引きの時間まであと一時間十五分。

取引き時間は、丁度この埠頭から船が出る時間にセットしてある。

当然汽笛に併せて裏切り者の娘に銃弾を撃ち込むためだ。

宮野は、娘達には自分の計画のことは話してはいなかったようだ。

明美の暮らしぶりからも、志保がジンの求愛を受け入れたことから、それは明らかだといえる。

だからこそ、今まで生かしておくことが出来たのだ。

だが、明美は交際してしまった。

NOCと交際してしまったのである。

これはもう、致命的だった。

一刻も早く死んでもらわなければならない。

海は浜風の煽りを受け、波止場に霧雨を降らせている。

ジンの胸中もまた、波の様に、高く低く揺れ動いていた。

取引きの時間まであと一時間。

シェリーはこのことを知ったとき、いったいどう出るのだろうか。

彼女の性格から察するに、おとなしく引き下がることはまず無いだろう。

例え研究主任と言えど、今暴挙に打って出るのは、即、処刑と言う結論に繋がる。

明美のように、それを理解しているならまだいいが、全く解っていないからタチが悪いのだ。

埠頭には、澄みきった青空が広がっている。

にも関わらず強風が吹き荒れ、高波を舞わせている。

それはまるで、来ないでほしいと心の底から願いながら、絶対に明美を殺害しなければならないという葛藤と必死に戦っている彼の気持の揺れに大気が呼応しているかのようだった。

取引きの時間まであと四十五分。

時間にはわりときっちりしているターゲットのことだ。

もしかすると、そろそろ現れるかもしれない。

宮野にアポトキシンを盛られて副作用に見舞われるだけで済んだのは、ジンとベルモットだけだった。

確か、ベルモットが本名をシャロンからクリスへと改めたのは、丁度その頃だ。

それにしても、たったの十年ちよつとの間に色々なことが有りすぎた。

《まさか、二回もこんな目に遭うとはな……》

埠頭沿いの古ぼけた倉庫群は浜風に煽られ四六時中降り注ぐ霧雨によって、疲れ果てたジンの心同様にボロボロに錆び付いている。

取引きの時間まであと三十分。

なぜNOCは、組織に潜入したのだろう。

ヤツさえ沸いて出て来なければ、ターゲットはまだターゲットにならずに済んだのである。

FBI捜査官、赤井秀一……。

ジンですら、組んで仕事をしていたにも関わらず彼が組織から撤退するまで気付けなかったのだから、明美に気付ける筈もない。

だから、明美には何の罪も無いのだ。

だがもし、ヤツらが切れていないとしたら……。

その可能性が否定できない以上、一刻も早く、ターゲットには死んでもらわなければならないのである。

例えそれが、この世で唯一のフィアンセの肉親だったとしても……。

取引きの時間まであと十五分。

宮野を組織に招聘した時点で、既に分裂の兆しは見え始めていた。

それがあの様な結論を招くとは……。

アメリカ支部がFBIから目を付けられたのも、宮野がアメリカ全土から優秀な化学者を拉致同然に組織に引き込んでしまったがために、彼らの家族から出された搜索願いによるものなのだ。

《俺達が悪に追いやられた全ての原因が……、宮野なんだよな……》

そしてとどめの宮野が組織乗っ取りのために引き起こした、組織幹部大量毒殺事件。

この事件で、本来アポトキシンを医療で有効利用することを目的として結成されたこの組織が、巨大犯罪組織へと方向転換せざるを得なくなってしまった。

これによって、ジン、ベルモットを含む平和利用派は、ほぼ壊滅状態に陥ってしまったのである。

そこから先は筆舌に尽し難い地獄画図となった。

組織を掌握した宮野派と宮野派への復讐しか考えなくなってしまった平和利用派での血みどろの潰し合いが繰り広げられ、それが落ちて着いた頃には平和利用派が宮野派と殆んど変わらない集団となってしまうという最悪の結果を招く有り様となっていたのだ。

それが、二人ものNOCの潜入を易々と許すほどの組織の弱体化、明美の抹殺、そして、ほぼ間違い無くこの先に待っている、己の身を犠牲にしてまで手柄を立てさせようとしたシェリーとの破局、シェリー抹殺へと繋ぐていくのである。

取引きの時間……。

女の姿を確認したジンは、逃げ道を塞ぐために連れてきたウォッカと共にその前に踊り出た。

吹き付ける浜風が、三方を囲む倉庫と積み荷と船の壁に反射して、サイクロンの様に巻き上がる。

交渉は、想像通りの結果となり、ジンは計画通りに……、

明美に銃弾を、撃ち込んだ。

帰りのポルシェの中、ジンは、うわ言の様に繰り返していた。

「これで良かったんだ……。」

何も……、間違ってたねえ……。」
と。

彼のコードネームは【ジン】

彼の心身は、研究段階のアポトキシンの連用と立て続けに発生した組織存続に関わる事件により、崩壊寸前に達している。

3 【ジン】 《この瞬間、俺は宮野に負けたんだ……》（後書き）

今回は、薬と組織と宮野博士に関する伏線を重点的に拾ってきまして（＾Ｏ＾）

今回は、多分、シェリーさんに出てきていただくことになるかと…
…（変更の可能性が多分に有ります。御了承下さい

m（┐┐）m（＾Ｏ＾）

4 【シェリー】 《味方と言いつ切る者は、いったい何人居るのだろうか》

志保は、組織において重要な役割を担っていた。それは傍目に見ても、自分で見ても、明らかに分不相応なものである。

実力至上主義者の巣窟とも言うべき闇の世界でのこの人事だ。彼女をこのポストに就けたジン、そして、それを辞退しなかった志保に対するバッシングは、それはそれは酷いものだった。

「両親があんな研究に手を出したりするから……」

そう、彼女を上から下から突き上げられなければならない状況を作り出したのは、両親なのである。実験中の事故で亡くなったとは聞いていたが、おそらくそうではない。それぐらいは気付いていたが、何があつたのかまでは、よく解らない。だが、それがこの風当たりの強さを生み出しているのだということは、だいたい想像がついていた。

「まさか、ジンに追われることになるなんて」

ピンチになれば助けてくれるものだと思っていた。そう思い込んでしまっていたのだ。

今にして思うと、仕方のないことだったのかもしれない。志保のごとき者が、ジンほどの男に惚れてしまったことがそもその失敗だったのだ。一人の女と組織の存亡、秤にかけるなら自分でも組織をとっていただろう。

パソコンのキーを叩きながら、自分の少し前の姿を思い出す。そう、居心地が悪いながらも幸せだったあの時を……。

今は、それとは逆に表面上は平和だ。だが、心が満たされることは一度として、無かった。新たなロマンスの予感ほ毛利蘭という小娘によってその芽を刈り取られてしまっているし今身を寄せている阿笠宅にも、新出医師に化けたベルモットにより盗聴器を仕掛け

られたことがある。

つまり、ベルモットの気分一つで、いつ組織が攻め込んで来てもおかしくない状況が出来上がってしまったているのである。

……、それにしては、動きが鈍すぎる。もうとっくになんがしかのアクションがあってもおかしくないのだ。いったい組織は何を目標でいるのだろうか。少なくとも手を引いてくれた、ということは無いと思うのだが。

「……、解らない……、どういうことなの……」

解らない。いくら考えても明確な回答は導き出せたかった。

パソコンのディスプレイには、自分が研究していたアポトキシン4869に関するデータが並んでいる。データの内容は、組織においてシェリーと名乗っていた頃と同じく、アポトキシンの解毒剤、若返りを解くための薬の研究だ。

阿笠宅に匿われることが決まった頃から比べると、かなり進展したと言える。

中国酒パイカル。工藤新一から得た情報から、この酒によって一時的にはあるが若返りを解くことが出来たのだ。

パイカル。そういえば、正体を知らない構成員の中にパイカルというコードネームがある。他にも組織内で接触したことのないコードネームは山程あった。

ラム、マティーニ、バーボン、スピリタス、ライ、サンテミリオ、アールトアガサ、ブラッディーマリー。

志保自身を知るだけでもこれほどの数に上る。その内、アールトアガサが阿笠博士、ライがFBI捜査官、赤井秀一であるということ、そして二人は、既に組織から撤退しているということは明らかになっている。

だが……、撤退しているとはいえ、頭から彼らを信用していいのだろうか。……、……、出来ない。出来る訳がない。博士はほぼ間違いないパイカルで若返りが解けることを知っていた筈だ。にも関わらずその情報は、博士からではなく、工藤新一からもたらされている。

赤井は赤井で、組織を相手にしたときはいつもいつも足が異様に速いの動きがてんで鈍い。

どちらもまだ繋がりを否定できないのだ。

今志保にとって確実に味方である、信用できる、と言い切ることが出来る者は、いったい何人居るのだろうか。

江戸川コナン、否、工藤新一只一人しか見当たらなかった。

彼女のコードネームは【シェリー】

彼女は今、阿笠宅の地下室の中、自分が今孤立無援に近い状態であることを再認識している。

4 【シェリー】 《味方と言いつれる者は、いったい何人居るのだろうか》

更新が遅れまして申し訳ありません m (_ _) m

これから遅れないよう気を付けてまいります

m (_ _) m

今回は、シェリーさんの知らない構成員の方々を御紹介 (^ o ^)

取り敢えずもう、オリジナル構成員を創るつもりは有りません (^ o ^)

今回出したお酒は、全てが身近あるいは組織に敵対する誰かさんか、あの方に化けます

(_ v _) ニヤリ

次回はどうか……、アールトアガサかライか、ベルモット辺りに出てもらおうかと…… (^ _ ^ ;)

5 【アイントアガサ】 《組織は潰したい。だが、あの方は見逃したい》 前編

今まで一話完結を続けていましたが、今回は、ポルシェ事件、幽霊船事件の二つから拾っているため、二話、或いは、三話程度かかるかと思われます（^| ^;）
どうか、ご了承ください m（| |） m

5 【アイントアガサ】

《組織は潰したい。だが、あの方は見逃したい》前編

アイントアガサは今後どう動くべきなのか、真剣に悩んでいた。組織は潰してもらいたい。だが、あの方は見逃してもらいたい。どうにもならない矛盾。

宮野志保、工藤新一といった組織の被害者達と接していくうちに、それは次第に大きく膨れ上がる。

そして今、彼は漸くベクトルを定めたのだ。今まで、今の今までずっと潜伏していた男の突然の動き、それは、組織にとってもあの方にとっても予想外のものだったに違いない。

まず最初のアクション、それは、単独行動を取っているベルモットへの接触だった。もう、誰に化けているのかは察しが付いている。今までのクリスとしての彼女の動き、そして、無人の自動車事故と彼女が消えるタイミング。それを考えるとやはり、一目瞭然なのである。

悪いとは思ったが、志保には風邪をひいてもらうことにした。兎にも角にも、新出医師、否、彼に化けているベルモットに接触する口実を作らなければ始まらないのだ。

風邪。正式名称上気道感染。感染症である以上は、必ず病原菌が存在する。その培養に成功すれば、いつでもどこでも誰にでも、確実に風邪をひいて頂くことが出来るのだ。

コッソリ培養していたそれを、哀の部屋に撒き散らしておく。果

たして彼女は翌日から咳き込み始めた。このことによって、いつでも志保を新出医院に連れていくことが出来る。

だが、それで全ての策略が整った訳では無かった。なぜなら、新一が新出医師を疑っているからだ。したがって、彼の目を盗んで接触しなければならない。

ベルモットとの最も望ましい形で接触、それは言うまでもなく、組織や新一、FBI横槍を受けずにアージェントアガサとベルモットのみが会見の現場に居ることである。だが、それを望んだところでそんな贅沢は望むべくもないと言うことも覚悟はしている。せめて、組織からの横槍を阻止できる状況にもっていく事にしよう。これが今のところ自分が立て得ることの出来る最善の策であった。

そして、策の実行。まさかここまで容態が悪化するとは思ひもし

なかったが、こうなってくれたほうがかえって都合がいい。急を要する状況のほうが成功率が高まってくれる。

アーントアガサとあの方は親友だ。否、親友だった。

彼等を別つ取っ掛かりとなったのは、言うまでもなく宮野厚司の幹部大量毒殺事件である。今彼が生きてこの世に存在していることはもはや奇跡と言える。そもそも、厚司の獲得を組織へと薦めたのは、アーントアガサなのだ。いや、それ以前に、厚司に薬の研究を手伝わせた、則ち一番始めに研究にタッチさせたのが彼だったのだ。アーントアガサが今生存している理由、それは言うまでもなくあの方の親友だからだ。また、彼の引き際が実に鮮やかだったことも重なった。

彼の引きかたは、決してまっとうなものではない。気付いた時にはその場から居なくなっている、いわゆる【ドロン】とか、【フェードアウト】とか言われているものである。組織内での彼は、あの事件で毒殺されたことになっており、事の真相を知っているのはあの方だけなのだ。

薬を平和利用することが目的であった組織が、巨悪の温床のようになっってしまったている。

自分が薬の研究をして、あの方が資金を提供する、これが組織の立ち上がったときの大まかな形だった。この組織を立ち上げた中心人物は、あの方ではなくむしろ自分だったのである。だからこそ、この諸悪の元凶を自分の手で叩き潰してしまいたいのだ。だが、巻き込んでしまったあの方は、謝罪の意味も込めてなんとか助け出したのである。

計画成功の鍵は、やはりどっち付かずの状態で個別に動いているベルモットだろう。彼女は、かなりの古参だ。あの方、アーントアガサ、そして、宮野夫妻に次ぐ古株である。

だからこそ組織に対して、いや、この研究に対しての恨みが物凄いものであることは想像に難くない。なにせ、彼女はこの薬の最大にして最悪の作用である若返りおよび不老不死化の最初

の成功例であり、被害者なのだから。

ジンに関しても、ある意味で成功例と言えるのかもしれない。だが、彼の場合は失敗も内包していた。

体細胞の再構築。

彼の症例は、それに失敗し、それ以外に成功したパターンなのだ。彼の体は二度も体細胞の再構築にしくじっている。だからこそ、あれほど組織を存続させることにこだわりを見せ、かつては平和派だった筈が人殺しもいとわない態度を示すほど豹変してしまったのである。

何とか解毒剤を完成させなければ彼の体は間違い無く近いうちに崩壊する、つまり、黒沢陣という男として死を迎えてしまうのだ。

解毒剤の研究は主任であった志保に対する殺害命令が当たり前に発令され、そしてそれを最も必要としているジンが陣頭指揮を取っていることから、おそらくは志保抜きでもかなり進んでいるのだろう。

だが、杯戸シティホテルの一件で酒蔵に入ったにも関わらずジンがパイカルに目もくれなかったことから察するに、こちらほど進んではない事も確かなようである。なんとかジンに、解毒剤の研究が自分達側のほうがかなり進んでいること、つまり、組織を存続させる意味はもうないことを知らせたいのだが、彼はほぼ間違い無く聞く耳を持ってはくれないだろう。

彼を遠ざけるは必然、そして止む無し。

ジンもまた、正式な組織の被害者であったのだが、アーントアガサは彼を遠ざける策を打つことに決める。

この策を打つには、新一の命を守るための装置が必要となる。できれば彼も遠ざけたいところなのだが、おそらくは感付くだろう。状況によっては二人の対決が有り得るかもしれないが、遅かれ早かれ二人には接触してもらうように仕向けるつもりでいたこともまた事実である。

【組織の壊滅を狙っている】その点に関しては利害の一致している二人である。しかも、片や組織内では二番目の切者、片や平成のシャーロックだ。敵対するより共闘体制を組んだほうが遥かに有益であることに気付くまでには、然程の時間も必要としないだろう。そしてそれは、彼にとってもまた望むところなのだ。

だが、ベルモットはこれを容認できるとしても、組織が絡むと理性がアンドロメダ星雲の遥か彼方にまですっ飛んでしまう新一の事である。根気強くベルモットの人となりを理解させていく必要があるのだ。今会わせるのは、間違い無く時期早焦なのである。

出来れば、新一も遠ざけたい。

これを満たすことの出来る策を打たなければならない。ジンと新一を同時に引き離すことが出来る策、そのような魔法が要求されるのだ。だが、計画がなかなかうまく運ばないのが世の理というもの。失敗したことを考えた対策も必要となってくる。そのための装置なのである。

専門は化学系だが、理工系の知識をも豊富に持ち合わせているア

ーントアガサのことだ。完成までには一週間とかかるまい。

「おい大丈夫かよ？」

新一が心配そうに志保を覗き込んでいる。いつもなら心配していても冗談半分に冷やかすような態度で接するきらいのある彼が、本当に心配そうに声をかけているのだ。それほど明らかに志保の様子は只事ではなかった。

動くなら、今が好機だ。

「本当は医者に診せたほうがいいんじゃないが……」

このまま放っておくのは、絶対によくない。今日は日曜日。そういう意味でも、新出医院の名が真っ先に浮かんでくるのだ。ここで、「そうじゃ！ 新出先生に頼もうか？」

とアーントアガサが切り出したとして、なにも不自然なことはないのである。だが、新一曰く、

「ああ……、さっき電話したけど留守だったよ……。きっと例の事件の裁判が近いから忙しいんだよ……」

とのことだった。計画は計画通りに進まない。これは予め覚悟を決めていたことである。しかも、それに対する対策まで、万全に練ってきたつもりだった。それなのに……。

ベルモット不在。

まさかこんな、根底から破綻することになるうとは、予想だにしなかったのである。

「そーいや杯戸町の東都デパートの中に病院があったから、そこに行ってみるか？ 確か休診は木曜だったから……」

たちまち代替え案を新一が出してきた。これに対して志保は、いわよ無理に行かなくてもと反対してくれる。

正直、策士アーントアガサとしても便乗して反対したいところだったが、阿笠博士という一人の世話好き爺さんがそれを許すことは出来なかった。

「まあとにかく早めに治すに越した事はない！ 風邪は万病の元というしのオ……」

アーントアガサが賛成派に回ったことによって、一行は東都デパートに向かうことになってしまったのである。

《それにしても、この病院はいったいなにを考えとるんじゃ？》

デパートという不特定多数が集まる空間に病院。志保はただの風邪であるが、これが肺結核や、インフルエンザならどうなっていることやら……。それを考慮に入れた場合、絶対にあってはならない立地条件だと思うのだが。

そんな心配をしながら進めていた交渉は、

「診察が立て込んでおりまして……」

という病院側の都合で、二時間後ということに落ち着いた。

これは思わぬ収穫である。新出医院に搬送出来る見込みが再浮上してきたのだ。取り敢えず予約してそのままデパートで時間を潰すという新一の策に乗っておく事にする。この段階で何か企んでいると露見することが一番よくないのだ。最近の彼は、アーントアガサに対してまでも疑いの目を向け始めているのである。かわしきるには、全てに従っておくしか無いのだ。

卵粥が美味いと評判の店に行こうということに行き先を落ち着け

て車を降りた三人の真正面に待ち受けていた一台のクラシックカー、ジンの愛車と同じポルシェ356Aを見た途端に志保が目の色を変えて周囲を窺い始めてしまう。その車のボディカラーは緑、ジンののは黒で、明らかに別な車であるのにだ。その結果志保は、

「私パス……」

の一言のもとに、車に戻ってそのまま引き込もってしまった。

これによって卵粥を食に行く理由は皆無となったが、結局テクアウトしてこようということになり、目的地の変更は無し。

このままダラダラと二時間ものチャンス浪費するのはもったいないのだが、疑われているという立場上アーントアガサ主体で場を動かすわけには行かないのが辛いところだ。なんとか、自分主体で動ける状況が出来上がってくれること、アーントアガサはその時が来ることを心の底から祈っていた。

そう、あとは、その時が来るだけで彼は新出医院に志保を搬入することが出来るのだ。

そんな悶々とした空気のなかで、彼女等と遭遇したのだ。

本人達は頑として否定しているが傍目で見れば完璧に新一の恋人である毛利蘭、そして彼女の親友である鈴木園子、さらに、彼女等の英語の授業を担当しているネイティブアメリカン、ジョディ・サンテミリオンなる女性の三人だ。そういえば最近このジョディを何かに付けてよく見掛ける。サンテミリオン。組織とは無関係の筈のジョディなる女が酒の名であるセカンドネームを名乗り、やたらと蘭の近辺に出没しているのだ。不審だ。余りにも不審だ。

しかもこの女が居るところには、だいたいベルモットもセットになっている。ターゲットが蘭なのか、ベルモットなのかにもよるが、もしかするとあれがいつぞや優作が言っていたインターポールに居

る友人なのかもしれない。そうだとすれば是非とも接触して事情を説明したいところなのだが……、正体不明の今の段階ではまだまだその時期ではないのである。

取り敢えず、放置。

残念ながら、ジョディ・サンテミリオンに対しては、この姿勢を貫かざるを得ないだろう。

樽雅亭の卵粥行列で遭遇したのは彼女等だけではなかった。運が良いのか悪いのか、この行列を目当てにテレビクルーが取材に来ていたのである。もしここで取材されてしまおうものなら、すぐにでもこのデパート自体から撤収しなければならなくなってしまう。つまり、足であるワーゲンのハンドルを握るアークトアガサに【主導権が回ってくるのだ】。

そして、その瞬間はすぐにやって来たのである。

「ボウヤも卵粥を食べに【東都デパートに】来たのー？」

素晴らしい。実に素晴らしい。このレポーターは、レポーターの鏡である。卵粥を食べに来たのか訊くだけで事足りる筈のレポートに、わざわざ視聴者の皆様のために、東都デパートという固有名詞まで出してくれている。

言うまでもなく江戸川コナンの姿はなんのイレギュラーも無くフレームに収まっており、

「あ、う、うん……」

と答える彼の姿は都のお茶の間にしっかりと届いたことだろう。それに続いた、いっぱい並んでるから止めるという言葉が、新一も事の重大さを把握したことを物語っていた。

時節到来。これは、絶対に逃すことの許されない千載一遇の好機である。案の定新一は帰ると蘭に告げ、アーントアガサの手を無理に引っ張って行列を後にしている。

さあ、新出医院へ！

と意気込んだところに、アクシデント。

「うわああああ……！」

突然駐車場内に中年男性のものであると思われる悲鳴が轟き渡ったのである。

〈続く〉

5 【アイントアガサ】

《組織は潰したい。だが、あの方は見逃したい》前編

お久しぶりです（＾Ｏ＾）／

今回は、ハカセです（＾Ｏ＾）

実は、組織を壊滅させるための一番重要な動きをとるのはハカセなのではないか、ハカセのアシストがなければコナンは組織を潰せないのではないかと考えています○（＾ー＾）○

ですが、彼は、あの方の筆頭被疑者であり、疑わしい点が非常に多いこともまた事実なんです（TOT）

そこでこじつけたのが、この設定。でもこのパターンが一番辻褄が合うような気がするんですよー……（＾―＾；）

次回は、ポルシェ事件後半から、幽霊船事件前半までです○（＾ー
＾）○

ではでは（＾Ｏ＾）／

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5588b/>

ポイント・オブ・ビュー ～【組織目線】から見る組織崩壊～

2010年10月16日00時12分発行